グレゴリオスへの手紙

オリゲネス
藤遥　制作

1〜4節　エジプトから取ったものと、聖書を読むこと

1:1 このうえなく熱心で、このうえなく尊ぶべき、敬愛するわが子グレゴリオスへ、オリゲネスより、神にあって喜びがありますように。あなたも知っているとおり、悟るための生まれつきの才は、修練を加えれば、成果を生むことができます。その成果は、人が修めようとするものの、届きうるかぎりの、こう呼んでよければ、目的へと通じるのです。ですから、あなたの生まれつきの才は、あなたをローマ人の、完全な法律家にすることもできるでしょう。名高いとされる学派の一つに属する、ギリシアの哲学者にすることもできるでしょう。しかし、わたしは、あなたが生まれつきの才の力をすべて用いることを望んでいます。目的としてはキリスト教のために、また、それを生み出す手段としても、です。そのため、わたしは祈り願います。ギリシア人の哲学のうちには、いわばキリスト教へ向かう一般教養の学科、あるいは予備の学びとなりうるものがあります。あなたが、それも取り入れるようにと。また、幾何学と天文学からも、聖書の解き明かしに役立つものを取り入れるようにと。哲学者たちは、幾何学、音楽、文法学、弁論術、天文学について、それらは哲学の助け手だと言います。同じことを、わたしたちは、哲学そのものについても、キリスト教との関係で言えるようになりたいのです。わたしがそう祈り願うのは、そのためです。

2:1 出エジプト記に、神がお語りになった言葉として書かれていることも、おそらく、このようなことをほのめかしているのでしょう。それは、イスラエルの人々に、隣の者と家に宿っている者から、銀の器、金の器、また衣服を求めるよう言え、という言葉です（出エジプト三・二二、一一・二）。それは、エジプトびとのものを奪い取って、神への礼拝に用いるものを造る材料を得るためでした。イスラエルの人々がエジプトびとから奪い取ったものから、至聖所の中のものが造られたからです（出エジプト一二・三五〜三六）。すなわち、ふたのついた箱、ケルビム、贖罪所、そして、御使いのパンであるマナを納めた金のつぼです。これらは、エジプトびとの金のうちでも、最も美しい金からできたのでしょう。それに次ぐ金からは、内側の垂幕のそばにある、全体がむくの金の燭台と、その上のともしび皿ができたのでしょう。また、供えのパンを載せた金の机と、その二つのあいだにある金の香壇もできたのでしょう。第三、第四の金があったとすれば、それからは聖なる器が造られました。エジプトの銀からも、ほかのものができました。イスラエルの人々は、エジプトに寄留していたとき、その寄留から次の益を得たからです。神への礼拝に役立つもののために、これほど多くの尊い材料を豊かに得たことです。また、エジプトびとの衣服からは、細工を必要としたものが、みなできたのでしょう。その細工とは、聖書が名づけたとおりの、刺繍した細工、縫い合わせた細工です。神の知恵を受けた刺繍する者たちが、これこれの布をこれこれの布に縫い合わせたのです。それは、垂幕と、外側と内側の幕ができるためでした。

3:1 それにしても、エジプトから取ったものが、イスラエルの人々にとってどれほど多くのことに役立つか。それを、時ならぬ脇道にそれて論じ立てる必要があるでしょうか。エジプトびとは、それを用いるべきように用いませんでした。しかし、ヘブルびとは、神の知恵のゆえに、それを神を敬うために用いたのです。とはいえ、聖書は、イスラエルの人々の地からエジプトへ下ったことが、ある人々には害となったことを知っています。そうして、次のことをほのめかしているのです。ある人々は、神の律法と、神に対するイスラエルの奉仕の中で育てられます。その後で、エジプトびとのもとに、すなわちこの世の学問のもとに寄留することは、その人々には害になる、と。現に、エドムびとハダデは、イスラエルの地にいて、エジプトびとのパンを味わわなかったあいだは、偶像を造りませんでした。しかし、彼は賢いソロモンのもとから逃れて、エジプトへ下りました。それは、神の知恵から逃れたようなものでした。そのとき、彼はパロの妻の姉妹をめとって、パロの親族となり、子をもうけました。その子は、パロの子らの中で育てられました（列王紀上一一・一四〜二〇）。そのため、彼はイスラエ

ルの地に帰ってきたとはいえ、神の民を分裂させるために帰ってきたのです。そして、金の子牛について、民にこう言わせるためでした。『イスラエルよ、これらはあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々である』（列王紀上一二・二八、出エジプト三二・四）[1]。わたしも、経験から学んだので、あなたにこう言いたいのです。エジプトにある役に立つものを取り、そこから出て、神への礼拝のためのものを造る人は、まれです。しかし、エドムびとハダデの兄弟は、多いのです、と。この兄弟たちとは、ギリシアの、ある種の巧みさから、異端の考えを生み出した人々です。彼らは、いわば金の子牛を、ベテルに造ったのです。ベテルとは、訳せば『神の家』です。わたしには、みことばがこれによっても次のことをほのめかしているように思われます。彼らは、自分たちの作りものを、聖書にすえたのだ、と。聖書には神の言葉が住んでいるので、比喩としてベテルと呼ばれるのです。みことばによれば、もう一つの作りものは、ダンにすえられました（列王紀上一二・二九）。ダンの境は、最後の境であり、異邦人の境に近いのです。それは、ヌンの子ヨシュアの書に記されていることから明らかです（ヨシュア一九・四〇～四八）。ですから、わたしが説明したハダデの兄弟たちが作り出した作りものの中には、異邦人の境に近いものがあるのです。

十二 ですから、敬愛するわが子よ、あなたは何よりもまず、聖書を読むことに心を向けなさい。そうです、心を向けなさい。わたしたちは、神のことを読むとき、大いに心を向けることを必要とするからです。それについて、軽率に何かを言ったり考えたりしないためです。神のことを読むことに、信仰ある、神に喜ばれる心構えをもって心を向けながら、そこで閉ざされているところをたたきなさい。そうすれば、門番があなたにあけてくれるでしょう。この門番について、イエスは『門番は彼のために門を開き』とおっしゃいました（ヨハネ一〇・三）。また、神のことを読むことに心を向けながら、正しく、神への揺るがない信仰をもって、捜しなさい。多くの人々には隠されている、聖書の言葉の意味を捜すのです。しかし、たたくことと捜すことで満足してはなりません。神のことを悟るための祈りもまた、何より必要だからです。救い主は、この祈りを勧めておられます。『門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』、『捜せ、そうすれば、見いだすであろう』とだけ、おっしゃったのではありません。『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』ともおっしゃったのです（マタイ七・七、ルカ一一・九）。これらのことは、あなたへのわたしの父としての愛から、あえて書いたものです。あえて書いたことがよいかどうかは、神と、神のキリストがご存じでしょう。また、神の御霊とキリストの霊にあずかる人も、知っているでしょう。あなたも、それにあずかるように。そして、あずかることを、いつも増し加えていくように。そうして、『キリストにあずかる者となった』と言うだけでなく（ヘブル三・一四）、「神にあずかる者となった」とも言えるように。

訳注

1 金の子牛を造ったのはヤラベアム王。オリゲネスは二人の話を重ねている。

グレゴリオスへの手紙

2026年11月23日版
著者　オリゲネス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/origen-letter-to-gregory/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/origen-letter-to-gregory
全文を、ギリシア語原文（Ἐπιστολὴ πρὸς Γρηγόριον）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。